

多元要因によるニカメイガ第2回成虫誘殺最盛期予察式の改善

伊藤博

1. 1962年以降10ヵ年の県下各地の予察灯調査成績から4項目の予察対象を選定し、ニカメイガ第2回成虫誘殺最盛期の予察方法を検討した。供試資料では、第1回成虫誘殺最盛日の県下平均値(X_4)、7月日照時数(X_2)および第1世代幼虫50%蛹化日(X_3)、予察対象によっては7月~8月上旬の平均気温の積算値(X_1)が予察要因として適当であり、これらを組合せた多元回帰式の利用が予察精度向上に有効であった。

2. 予察式の利用にあたり予察時点が問題になるが、予察精度の向上を前提とした場合は予察時点を現行から早め得る効果は少なかった。予察要因利用可能時期は、 X_4 は7月中旬、 X_2 は7月末、 X_3 は8月10日頃になるが、適当な推定値を求めればそれぞれの要因について1半旬程度はこれより早めることができる。実用上は時間的に先行する予察要因を利用して予察を行ない、利用可能時点に達した要因を追加して予察精度の向上をはかることになる。

3. 本報で検討した予察対象は、ニカメイガ第2回成虫誘殺最盛期の概括的な指標である。全県的な第2世代幼虫防除適期決定の参考資料としては有効であるが、県下の防除所以下の防除実践単位の適期防除実施には、さらにそれぞれの地方に適合する予察方法の検討が必要である。